

べきを、また関東軍司令官には、北支那方面軍の作戦を容易にするとともに、おおむね内長城線以南（承德方面）に進出している関東軍所屬部隊を、北支那方面軍司令官の指揮下に入らせるよう命じた。関東軍部隊は代州を發し、十月四日から崞県、次いで原平鎮を攻撃し、執拗な山西軍の抵抗を排除してこれを占領した。北支那方面軍は十月十七日、第一軍の一部に石家莊会戦後、正太線方面から太原平地に進出するよう命じ……。

原平鎮南方の忻口鎮付近の山西軍兵力は約十四個師と判断され、その陣地は半永久的に堅固に構築されていた。第五師団は関東軍部隊を加え歩兵約十八個大隊、野山砲以上の火砲九五門を有していた。

このように北支に増援された関東軍部隊に茂岡さんの師団が含まれ、特に原平鎮の作戦、戦闘で大隊長、中隊長以下上司が戦死されたわけである。

昭和十二年七月七日、支那事変勃発、八月十八日、関東軍命令で部隊は一面坡（満州濱江省珠河県）より

応急派遣、承德（熱河省承德県）からトラックで出發。九月九日、天鎮、陽高（山西省北部大同東北方）撃破。十五日、大同攻略。十月十日、原平鎮の戦闘。十二月三日、太原入城。十月五日、原所屬復帰のため満州帰還とある。約三カ月間の北支の作戦従軍が本聞き取りの主要な部分である。

戦地、蒙疆

軍人と民間人の苦勞

長野県 春日 太喜治

私は農家の三男として上伊那郡旧西春近村で生まれました。長兄は昭和六年、北朝鮮へ入宮しましたが、満州事変勃発で除隊ができず、私有家の農業を継いでいました。二兄は幼児の時、熊蜂に刺され死んだということでした。大正五年生まれの私は、昭和十二年徴集兵として兵隊検査を伊那町で受けましたが、第一乙種でありました。当時、第一乙種は現役でなく補充兵

でしたから、ずっと米と養蚕の農業をしていました。

当時、すでに支那事変が始まっており、昭和十三年七月充員召集により、東京中野の電信隊に入隊しました。そのため、家業の農業は母と妹たちで、上の姉は東京の板橋の方へ嫁いでおり、心に残るものはありましたが、中野には三日いただけ、佐伯部隊とし編成し、直ちに出發しました。

宇品港からどこへ行くのか、われわれ新兵には勿論分かりません。中国の戦線は拡大されつつある時ですから行動は秘密であり、海の色が黄色になってきたので揚子江へ入っていったことを知らされました。やがて南京上陸、三カ月間、南京での通信の教育を受けました。

教育終了後、毎日行軍です。九江から武漢攻略戦に参加するということを聞いた。私の通信隊は戦闘部隊（連隊や大隊）ではなく後方部隊だから、戦闘の後を行く。死人が道路の傍らに転がっている。戦争の悲惨さをまざまざと痛感しました。

江西省の九江で一カ月教育、行軍をして武昌に着い

たのは昭和十三年十一月三日だと思えます。陥落入城の祝いをしていました。漢口も大体攻略（これで武漢三鎮は陥落）したので、あまり戦闘せず漢口の街を見学に行きました。漢口の街はあまり被爆されずに、大きな建物はそのままでした。昭和十五年、私は武昌で召集解除の命令がでて、内地帰還、宇品上陸、伊那の実家へ帰りました。

家で農業をやっていたとき、現地へ行っていた知り合いが現地除隊していた。その張家口にいた友人から「あなたは長男でないから、こちらへこないか」との手紙がきました。家に一カ月ただけで、今度は地方人（一般人）として北京へ行き、乗り換えて京包線約八時間乗り終点の包頭の手前の張家口に着きました。

当時、内蒙古は徳王が王様だったが、日本人が実権を握っていました、紙幣は北支のとは違っていました。張家口では蒙疆銀行へ入社し、私は終戦まで勤務していました。昭和十五年蒙古へ行き、十八年に郷土の伊那へ嫁をもらいに一時帰りました。見合い相手は大農の娘だったが、私も既に書記補になっており、親子と

も、来蒙でもよいということとなり結婚いたしました。

内蒙古には、蒙古人、朝鮮人が多く、日本人は上層部におり、国立銀行でも良い待遇を受けていました。

蒙疆電業とか華北交通とか国策会社があり、内地より良い所でした。

私は蒙古の地で骨を埋める気持ちでした。気候は冬は寒さが厳しく凍りつくが、家屋の施設は良くできていて生活には支障なく、日本人は張家口の城内に家族共々住居していて、軍隊に駐蒙軍諸部隊がいました。

昭和十九年に外蒙に近い所の銀行の出張所開設員となり、朝鮮人と蒙古人と一緒にバオの中で一年間生活していました。日本人の中にはややもすると腰掛け的な気持ちで外地に行き、現地人を利用するだけの者がいた。五族協和は単なる方便的な言葉ではないのです。私は当時、満、漢、蒙、朝の人々と日本人と一緒に生活し五族の一体をと私は思い、先ほど申しましたように、夫婦、子供共々蒙古の地で骨を埋める気持ちでいたし、出張所開設の時は、蒙、朝の人と三人で一つの包（バオ）天幕張りの移動家屋）で一年間も生活した

のです。

しかし、私どもの理想も現実とは違って戦局も厳しくなり、十九年終わりには現地召集を受けました。私は上等兵でしたが召集兵は一等兵が多かった。警備地域は、北白川宮様が事故で戦没した清河橋で、私はそこに駐屯したのです。付近には少数の共産八路軍がいましたが、攻めてはきませんでした。幸いに警備地域の中に家族も住んでいました。

終戦を知ったのは仲間から「日本は負けたらしい」という情報はもらいましたが、上から正式にはありませんでした。われわれの警備隊は後方部隊で兵隊は少なかったので、張家口へ集結を命ぜられました。家族は列車で華北、北京まで先に戻すことができ、私は安心しました。終戦となると八路軍は西方の山から撃ってくる。しかし、こちらから先に撃つことは止められていました。

日本軍は邦人を守りながら、張家口から北京へ、中央の道ではなく山の中を徒歩で北京まで歩いて行きました。周囲を八路軍などに囲まれながら徒歩です。攻

め込んでほなかったが送り狼みたいなので、決して快いものではなく、不安を抱きながら、万一、八路軍が攻撃したらと、勝ち戦ではないから、こちらからは攻撃できない。敗戦、降伏ということなのだから心は暗い、早く離脱し北京への気持ちでいっぱいでした。

蒙古から華北に出たから、われわれ部隊の現地召集兵は解除し、私は家族のところへ行きました。北京には銀行の支店があり、塘沽の家族宿舎におり安心しました。他の内地人はお寺などで生活していたらしいが、妻と三歳の女兒は支店で生活していました。

在留邦人は引揚げ団体を作り、小児とか老人を持つ家族は早く帰れるようにし、幸いに私も家族を連れ、昭和二十年十二月塘沽からの第三便に乗船し、十二月十三日宇品上陸、十五日には伊那の西春近に着きました。

田舎といっても食物はなかなかなかったが、都会よりは良かったようです。部落の団体の笹の葉や野菜を採り、隣近所でそれを叩き切る音が、あちこちでしていました。闇米が一升二百円（当時の金で）もする。

新円封鎖だ、五百円生活だという戦後の経済状態の中での、米一升二百円とは、とても生きてゆける状態ではありません。しかも、お金で米は買えず、衣料などと交換で米を買うのです。

私も闇屋をやりました。米を持って静岡の魚や塩と交換し、それを伊那で売る。東京へも往復しましたが、だんだんと統制、取締りで闇商売がやかましくなり、正常の商売へとだんだん入って現在に至っているのです。

私は復員者ではあるが、故郷に基盤のない引揚者でもありました。引き揚げるとき、親子三人で、一人一千元、計三千元もらったが、たちまち無くなり売り食いをしていました。死に物狂いで働いたが、働かねば親子三人「路頭に迷う」。文字の解釈どおり「住むに家もなく、生活の道もなく、ひどく困る」のであるから夜も寝ずに働きました。周りの人から「引揚者は良く働く」といわれたが、当時まだ三十歳代だからそれもできたのでしょうか。

家を手金で買い、十五貫（約六〇キロ）くらい野菜

を仕入れ、家の軒下で売り始めた。一日三回歩いて野菜を仕入れ、売り捌く。次に古い自転車を買えず賃借りし、次に太いタイヤの二〇貫積める自転車を買う。

次に昭和二十八年十五万円中古自動車を買ひ、東京の鮫州へ免許を取りに行きました。初めは自分の食料品を運搬し、八百屋をだんだんと広げ、他の人の物の運搬をしたりしつつ、現在に至っています。

戦後の苦勞を子供や孫に話をするので、今皆、良くやってくれています。私は軍隊でも、外地でも、終戦後、引揚者として苦勞しましたが、子供たちは幸せであります。

軍隊は運隊だ

北支特別警備隊

栃木県 増 淵 明

私は大正十年十月十日に生まれました。現在は市町村合併で大田原市ですが、昔は那須郡親園村大字宇田

川といっていました。家族は両親と祖母の四人家族で、私は一人息子でした。長閑な田舎で、家の前に山あり裏に小川ありで、その川には鳥貝や天然記念物の都たなごが生息し、人情味豊かな素朴な農村です。家業は農業で田畑二町六反くらいで、生活程度は中位でした。村立小学校を卒業後、高等科は大田原の学校を卒業し、家族四人楽しく暮らしていました。

適齢期になり村役場の兵事係から呼び出されまして、翌日の徴兵検査について諸注意を受け、村から十三名が受検しました。私と増淵四郎君と二名が甲種合格となり、嬉しさで万歳をしました。他の十一名はなんだか淋しそうでした。私も夜、家で親の心を思うと、どのようなことでも辛抱して頑張って絶対戦死せぬように無事に務めを終えて帰るのが一番親孝行だと思っていました。

昭和十七年三月十日、近所の人たちに盛大に見送られ、宇都宮の第十四師団留守部隊に現役兵として入営しました。初めに想像していたより待遇が良いので、ちょっと安心していましたら、一週間で外地に出動を